

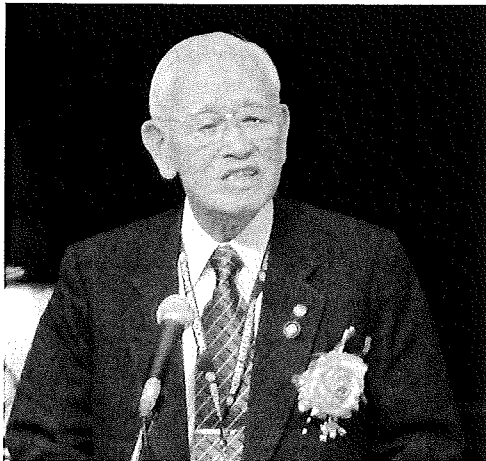


## ■今井鎮雄氏 (RI元理事) 特別寄稿 「有事のロータリー」

# 阪神大震災 ロータリーは何ができたのか？

昨年10月帯広市で開催されました第2500地区の地区大会にRI会長代理としてご臨席を賜りました今井鎮雄氏(神戸西RC)は、大会でのご挨拶でも触れておられましたように、11年前、1995年1月17日に発生した阪神大震災を、被災地のその渦中で体験されています。今井氏がRI理事に就任される半年前のことでした。

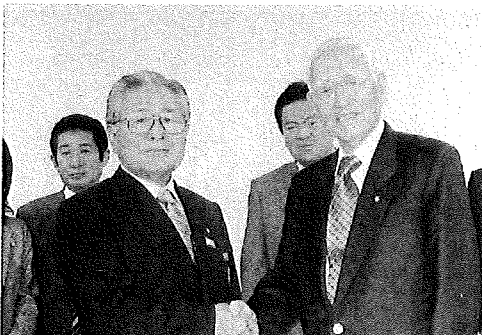
震度7、死者6434人、負傷者43792人、全半壊約250000棟、避難人数約300000人、未曾有の大地震にあたって、一人のロータリアンとして何ができたのか、ロータリークラブとして何ができたのか、何をしたのか。自らの目で見えた“ロータリーの底力”をご寄稿いただきました。



### [今井鎮雄氏略歴]

#### 〈ロータリー歴〉

- 1961年 11月 神戸西ロータリークラブ入会
- 1980-81年 RI第2680地区ガバナー
- 1982年 5月 国際協議会グループリーダー
- 1983年 5月 国際協議会グループリーダー
- 1984-89年 RI青少年活動委員
- 1989年 ソウル国際ロータリー研究会副委員長
- 1992-94年 アジア地域ローターアクト実行グループメンバー
- 1995-97年 国際ロータリー理事
- 1999年 RI会長主催アジア会議委員長
- 1999年 シンガポール国際ロータリー研究会委員長
- 1999-2000年 RI RYLA委員
- 2000年 RI プリスベーン国際大会委員会副委員長
- 2004年 RI 大阪大会委員会副委員会
- 2003-06年 ポリオプラスパートナーグループ委員長補佐  
(ゾーン1、2、3、4 および9)  
ロータリー財団メジャードナー、米山功労者



#### 〈その他〉

- (財) 神戸YMCA名誉顧問
- 兵庫県青少年愛護審議議会会長
- 神戸市青少年育成協議会会長
- (財) 兵庫県青少年本部理事長
- (社福) 神戸市社会福祉協議会理事長
- (学) 啓明学院理事長
- (財) PHD協会理事長
- (財) ひょうご子どもと家庭福祉財団理事長
- (社福) ひょうご障害福祉事業協会理事長
- (社) 家庭養護促進協会理事長
- スペシャルオリンピックス日本・兵庫 会長



1995年1月17日、朝の5時46分52秒という時間が記録されていますが、大変大きな衝撃がありました。

私どもも寝ておりましたが、家が縦横に揺れてベッドが上へ突き上げられるような状況でした、いったい、何が起こったのだろう。事態を把握することができません。地震は横に揺れるものと思っていましたので、この事態が地震と結びつくまでには少しばかりの時間を要しました。ようやく「これは大きな地震だ」と気がつき、暫く揺れが収まるのを待ちました。私の家では雨戸も立てていましたのでほとんど部屋の中は真っ暗でした。私の体の上、布団に大きな丸い物が載っていました。2メートルくらい離れている場所にあったテレビでした。こんな大きなテレビが飛んで来るのですから、大変な地震だと驚いたことを思い出します。娘の部屋に行ってみると、娘がベッドから出られない。よく見ると、大きな本箱が倒れていました。幸いにベッドの端の方でそれが引っ掛かり、娘自身は何ともありません。慌てて動いても何が起きるか分かりませんので、明るくなるまで下に降りずに2階で時間の経過を待ちました。

7時過ぎに回りが明るくなり、スリッパを履いて階下に降りました。重い食器棚は立ってはいましたが、中の物はほとんどが外に飛び出し壊れ散乱していました。それをスコップで片付けた後、私は車を出して神戸市役所の方に向かいました。

私の家は神戸市の御影というところにあり、普通なら15分も走れば市役所に着くのですが、その日は途中で電線が切れていたり、建物が横倒しになって通れなかったのです。上に上がったり下に回り道しながら、少しずつ市の中心、三宮の方に近づいていくと、途中、家や建物が壊れた跡で布団を被って寒さを凌ぎながら、焚き火をしている方々がいました。その間を抜けて、市役所に着きました。午前9時頃だったと思いますが、ぼつぼつ職員の方々が集まってきている段階で、救援本部はまだ十分に機能していない状況を見てから、私が勤めていたYMCAに向かいました。途中、大きな建物がピサの斜塔のように斜めになっていました。

YMCAに着くと、幸いなことに室内プールの水がそのまま残っておりました。大事な水です。この水を地域の方々のために上手に使うようにと言い置いて、次にその当時責任を持っていた大学に向かいま

した。幸いにも建物は無事でしたので、体育館とかチャペル等で被災された方々を受け入れることが出来るようにと手配をしました。

一回りをして家に帰ったのは当日の夕方でした。孫たちはどのようにしているかと気になり、自転車を漕ぎながら、息子夫婦や孫たちが暮らすマンションまでたどり着くと、御影の方に避難してますと貼り紙がしてありました。行き違いだったようです。立派なマンションであるにもかかわらず、水を汲み上げることもできない、エレベーターも止まっており、暮らしの不自由を感じ、息子夫婦は孫たちを連れて私の家に避難してきたわけです。翌18日は、この孫たちも一緒になって、近くの高齢者のお宅の片付けを手伝いました。



その日の午後になって電話がようやく通じます。すぐさま、日光の近く、栃木県の鹿沼ロータリークラブの石原パストガバナーから電話をいただきました。「大変な地震のようですね。実は炊き出しのためのクラブ員が何人かそちらに向かってますので、着きましたらご指示をお願いします」というお話でした。「ちょっと待って下さい。今来ていただいても、寝るところもなく、食事を確保することもできません。またどこを手伝っていいのか、混乱をしている状況なので少し待っていただけませんか」とお返事をしようとしたのですが、石原パストガバナーは、「もう若い会員が3人で出発しています。明日には着きますからご指示をお願いします」ということでした。

次の日、19日の早朝電話がかり「今、お宅の玄関におります」。慌てて玄関に出ますと、鹿沼ロータリークラブの方々がいらっしゃって、ワゴン車にはプロパンガス、お米、ポリタンクに入った水、釜、そして一斗缶に入った漬物等が積まれていました。「これでとりあえずは温かいご飯の炊き出しをしたいと思いますが、何処でやったらよろしいでしょうか」ということでした。

市の中心部からは煙が立ち上っています。火事になっているようです。しかし電気が来てませんのでテレビも映らず、当事者である住民は、今、町がどうなっているのか総合的な判断はできません。



近くを回り、とりあえず御影駅の駅前で炊き出しをすることにしました。「温かい“おにぎり”を作りますので、必要な方はどうぞいらして下さい」とマイクで呼びかけたところ、大勢の方々が来られました。電気は来ない、ガスは来ない、水は止まったままでライフラインが途絶えた状況ですから、皆さん、食べることが出来ず、喜んでこの炊き出しを受け取って下さいました。

最初のうち、私も鹿沼クラブの方々と一緒におにぎりを握りましたが、ご飯が炊きあがったそばから、次から次へ握るものですから、手が真っ赤に腫れあがってしまいます。もう一度マイクを取って、「私どもはロータリークラブの者で4人でここに来ています。手が足りません。どなたかお手伝いをお願いできませんか」と呼びかけたところ、近くのご婦人方がお手伝いをしましょうと名乗りを挙げて下さいました。

このように、鹿沼ロータリークラブの皆さんは、19日、日が暮れるまで炊き出しをして下さいました。次の日、20日はJR六甲道駅の南側の広場で同じように炊き出しをしました。このあたりも大きな災害を受け、神戸大学の留学生たちが暮らしていた小さな下宿も倒壊し、亡くなった学生もいました。ここで物資が尽きるまで、休む間もなく炊き出しが続けられ、その日遅く、鹿沼のロータリアンの方々は帰途に着かれました。

一つのクラブが決意をし行動を起こし、そのことが被災地、神戸の人たちに感銘と感謝を呼んだことを、私たち市民は忘れることができません。

さて、私の所属する神戸西ロータリークラブは、20日の金曜日は例会日でした。例会場であるホテルオークラは、建物自体はそのまま残りましたが、ライフラインが壊れ、閉鎖していて利用することはできません。20日はさすがに例会は実施できませんでした。

次の週、27日には、とにかく皆の顔が見たい、集まろうとそれぞれが呼びかけて、例会を持つことにしました。しかしホテルオークラでは無理ですので、長田にある会員の高校の教室を借りて例会をさせて頂きました。青果の仕入れをしている会員から

ミカンを一箱寄贈していただき、このミカンが例会の食事になります。幸いクラブのメンバーは全員無事だったものの、多くの会員の家が壊れ、職場が潰れ、従業員や家族を亡くされています。体育館の中には600人以上の方々の遺体が安置され、教室その他には、大勢の避難をされる方々がおられる時で、今ロータリーは何ができるか、私たちのクラブは何ができるかということについて真剣に考え、話し合いました。

会員の皆さんの話を聞きますと、ロータリアンがそれぞれの職業を通してこの大きな災害に 대응しようとする姿がよくわかりました。

中央市場に席を置く会員は食糧の確保に懸命の努力をしました。「お金をいただけるかどうかかわからないけれども、今の神戸の町の人たちに食糧を届けるのは、私たちの大事な使命である」とおっしゃっていました。段ボールを作っている会社の会員は、各地の避難所に段ボールを運び込みます。「ゴザ代わりにそれを敷いて、少しでも暖かく寝ていただく」という配慮です。寒冷の被災地をあつて、彼が真っ先にできるボランティアでした。

水道工事をしている会員、電気工事をしている会員、それぞれに自分の仕事を通して、ライフラインの復旧に懸命に努めて下さいました。鉄道や交通機関に関係する会員は、一日も早く復旧させようと努力されました。そして医者は緊急医療の応援に各地域の避難所に出向きました。大勢のロータリアンがそれぞれの職業を通して、それぞれの場所でのボランティアをされたことも、私たちは大事に記憶しておかなければならないと思います。

被災地、神戸のために、日本はもとより、世界中のロータリアンが祈ってくださり、緊急援助物資を送ってくださり、またボランティアとして駆けつけて下さいました。国内各地から、世界から、義援金が寄せられ、その後、7月末時点では義援金総額は8億円にまで達することになります。

こういう状況が進みますので、ガバナーやパストガバナーの皆様方と協議をして、義援金の使途やその方向性について大きな道筋を付けなければなりません。比較的被害の少なかった私の家に10数人が集



まりました。姫路や明石の方は、交通事情が悪くて真っ直ぐに来られず、遠く三田方面を迂回して、また、空路、海路、そして徒歩を組み合わせると、大変なご苦勞をかけ、やっと私の家に辿り着く方もいらっしゃいました。

ここで私たちは、ロータリークラブがどのような形で奉仕すればいいかということと一緒に考えました。

その話し合いの中で、ロータリーとして3つの課題に取り組むことになりました。一つは、今困っている人たちのお手伝いをする。二つ目は、2～3ヵ月後、少し落ち着きを取り戻した頃のプログラム。三つ目は、長期的に被災者のリハビリを兼ねた事業に取り組むということです。

震災当初は、とにかく緊急援助をしようということでした。

今日困っている方々のために、今日口に運ぶ食糧、あるいは今日寒さに震えている方々のために必要な衣料や毛布、あるいは熱を出したり体調を壊されている方々の救援、お年寄りの方々へのお手伝いや応援、まず、そのようなことをしなければなりませんでした。

その緊急援助に際しては、ロータリークラブやロータリーの関係機関だけではなく、広く市民のボランティアグループにも義援金から資金提供させていただくこととしました。

個人個人の「何かしなければ」という思いが、小さなボランティアグループを多く生みました。そうしたNPOの連絡協議会を作り、一つ一つのグループの働きを応援させてもらうことにしました。何処でどのような働きをすれば有効なのか、情報を整理し提供しました。そうした20近いグループの責任者に来ていただき、ロータリーが資金的な応援をし、困っている現場の方々に手を差し延べていただいたわけです。炊き出しにも、生活物資や衣料品の配付にも繋がりました。小さいグループには20万円とか50万円、大きなグループには何百万円という金額にも及びますが、そのような形でそれぞれのボランティア活動を応援させていただきました。その資金は、ロータリアンの皆さんの善意です。

関西学院大学の若い助教授を中心としたグループは、CATVを通して、その時その時の被災地の状況、またいろいろなインフォメーションを流しました。

画面では「これらのインフォメーションは国際ロータリー第2680地区の援助で提供することができました」という主旨のテロップが流れていました。

被災地のロータリアンの大半は、工場や事務所や従業員を失い、かろうじて残った職場は、地域の復興のためにもまず自分の仕事に専念しなければなりません。ですから、この地域での緊急援助のサービスは、大勢の若いボランティアの手に委ねられました。

義援金より支出していただいたバイク15台にロータリーのマークをつけ、それに乗った若者たちがあちこちを走り回り、先々で「今、何が必要ですか?」と伺い、「では、それを持ってきましょう」と。ニーズを発見しながら、それをボランティアの方々に実践をしていただくというシステムを作りました。さらに、当時はまだ普及途上だった携帯電話15台を購入し、携帯したことで、ますますバイク部隊は機能的な動きが取れるようになります。

やがて、200台の自転車部隊も加わりました。大勢の若者たちがそれに乗って物資を配りました。

そんなボランティア部隊の中に、「りんご娘」というニックネームの若い女性グループがありました。彼女たちはお弁当を持ってお年寄りのところを回ります。「こんにちは。お食事ですよ」と声をかけ、コミュニケーションを図ります。高齢で、家の再建や先の見通しを絶たれかけ、失意にある高齢者たちを、ある時は笑顔で、ある時は思いを伝える言葉で励ましました。何人のお年寄りが彼女たちの言葉に励まされ、生かされたことでしょう。



食糧が何とか足りるようになってからは、「元気の出ることをやろう」と私たちは考えました。子どもたちにグループで遊ぶ機会を作ってあげよう。疲弊したお年寄りをお風呂に連れて行ってあげよう。そうした心のケアが活動の中心になりました。地震のトラウマを持つ子どもたちのための癒しのプログラム、仮設住宅に移る子どもたちのためのプログラム、行政等とも連絡をしながら給食を始めるための準備、巡回の中から町のニーズを拾い上げ、対応していきました。

2～3ヵ月経つと、被災者の身辺も落ち着きを取



り戻し、次第に何とか自分の足で立ち上がろうという気持ちが出てきます。

その頃私たちが考えたのは、ロータリーならではの価値ある奉仕活動を見出すことでした。国際交流、青少年の育成等など、ロータリーが培ってきた奉仕の歴史から、自ずと目がいくのは“子どもたち”のことでした。

私たちのところに、留学生の諸君が震災で住まいを失い、勉学を続けることも困難だという情報が伝わりました。この人たちのための寄宿舎をとりあえず作ろう。勉強をしなければなりませんから、1人用の小さな部屋をたくさん備えた建物を建て、これが「ロータリー・フレンドシップハウス」という名前前で呼ばれ、3年を目処にして考えました。3年経てば、留学生諸君はそれぞれ卒業することになります。その期間をそこで過ごして、支障なく勉学に励んで欲しい、との思いです。

同じように、震災で取り残された子どもたち、両親が復旧のために家の整理をしなければならず、一人で置かれている子どもたち、そうした状況の子どもたちのお世話をし、そして子どもたちを励ます「ロータリー子どもの家」を作らせていただきました。英語では「チルドレンズ・リハビリテーションセンター」で、心も体も家族の問題もケアできるセンターとして機能させようと考えました。

両方とも義援金の中から、多くのロータリアンがボランティアとして奉仕をしてくださり、専門の建築技師たちが指導をして、プレハブを建てて、施設を作ることができました。

「ロータリー子どもの家」は、その後もローターアクターやインターアクターの方々にお兄さん役、お姉さん役を務めてもらったり、あるいは遠くからローターアクトの方々、インターアクトの方々が見学に来てくださり、地域の方々の希望で、11年経った今でも、地域の子どものための施設として活動が継続されています。こうして「ロータリー子どもの家」の業績が立派に上がっていることを喜んでおります。

さて、このように緊急援助、アフターケアの援助、それから中長期の援助を行ないました。今でもこれらのあるものが運営されています。被災地の中心、神戸にこのとき居合わせた私の目で、見聞きしたことを中心にお話ししたしましたが、それ以外にも、

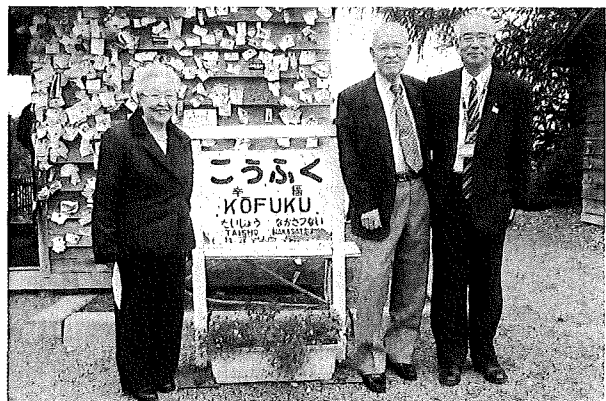
被災地やその周辺のロータリークラブが、その地域の現状を鑑みて、それぞれに社会奉仕プログラムを繰り広げております。これもひとえに、ロータリアンの皆さまから頂戴した大切な義援金が礎となったことを再度お話し、お礼を申し上げたいと思います。

大震災から11年経った今、有事にあって、ロータリーはいったい何をしたのか、何ができたのか、ということをもう一度思い起こしております。

震災直後から、私たちばかりではなく、多くのNPO、市民グループが、ボランティアとして活動してくださいました。歴史的にも類を見ない市民レベルでの動きでした。誰もが地域の仲間で、互いに助け合うのは当たり前のこと、誰もがそう思い、できることから手を付けました。昔のようなお隣さんの意識、相互扶助の意識が再生し、それが救援、復興のバックボーンとなりました。

私は震災後、「新しい価値観の創造」という言葉を使っています。経済効率がいいとか、これだけ儲かるとかいった発想ではなく、もっと違った価値観があるはずですよ。例えば、あれだけ被害を受けた神戸がいくら頑張っても他の都市に追いつくのは大変なことですよ。それなら、人間が生きていく価値観を含めた、新しい都市機能を考え直すいい機会ではないか。いままでの価値観と違った価値体系を再創造していくことが大切ではないかと思っております。

人々の善意や思いやりの中であって、ロータリーができたこと、一人一人のロータリアンができたことこそ、神戸という町の「新しい価値観の創造」そのものであったと確信しています。



地区大会で来帯時 竹林地区副幹事と